

## F-6 可児市の最高峰「浅間山」

浅間山（奥十山や奥磯山ともいう）は、可児市で最も高い山です。高さ372mは富士山の約10分の1でほぼ同じ緯度（北緯35度）にあるということからか、「美濃富士」とも呼ばれています。山頂には富士山と同じ名前の浅間神社があり、山や水、安産や子育ての神様で桜の花を指す木花之佐久夜毘売命が祀られています。また、国の天然記念物に指定されているサクライソウの自生地もこの山中にあります。



浅間神社と浅間山

## 全域 久々利の地名由来

久々利は、可児市最古の地名とされています。日本書紀景行天皇紀には、「区玖利能弥擲（泳宮）に滞在した」と記され、万葉集にも美濃国の「八十一隣之宮」と詠まれています。正確な年代が分かるものとしては、飛鳥池遺跡で発見された西暦 667年のものと思われる木簡に、「三野国加爾評久々利五十戸」（美濃国可児郡久々利の里）との記述があります。このように1300年以上前から使われていたこととなりますので正確な由来はわかりません。現在の「久々利」の文字が使用されるようになったのは、土岐行春や千村氏の時代には、これが称されているようなので、おそらく鎌倉時代前後から慣用化されていたのでは無いかと思われます。なお、ククリに「纈纈」を充てる説もあります。纈纈とは絞り染の一種（布を括る染め方）であることから、その産地だった場所が「ククリ」だったので、この文字を充てたのではないかとのことです。ただ、久々利が絞り染の産地であった根拠はないので真偽は不明です。



泳宮



八坂入彦命墓

## G-3 八坂入彦命墳墓

八坂入彦命の墓所として1875年に定められた宮内庁が管理する市内唯一の陵墓です。墓の大きさは、東西26.5m、南北29.0mで、周囲に幅2.0mの土堤がめぐらされています。地元では皇子塚と呼ばれ、親しまれています。

八坂入彦命は、第10代崇神天皇の皇子で母は尾張の出身で大海媛（またの名を八坂振天某辺）とされ、母方の縁を頼って尾張から久々利に入り、この地に住み、東濃の民衆を服属させたと伝えられています。また、久々利に初めて治所を開いた祖ともいわれています。

八坂入彦の命には八坂入媛と弟媛という二人の姉妹が非常に美しかったことから、泳宮での景行天皇とのロマンス物語も伝承されています。

## D-5 「景行天皇とくぐり姫」のロマンス物語

景行天皇は先に双子の弟日本武尊に国取りを、兄大碓命に美濃の国見をさせました。美濃国へ行幸された天皇は、美しき姫が住むと聞く久々利の門前にあたる天が峰からの国見で、久々利の山河と営みが大和の宮（奈良県桜井市）に似ており安心されました。人々は、天皇が弟媛や入媛と池の鯉遊びで濡れた衣を岩で干し、円墳に似た山を「鷹の山」と呼び、姫たちと親しく遊ばれる姿を見守りました。（鯉養魚発祥地の伝えあり）

弟媛の進言「私より姉を妻に」で、天皇は入媛を愛され13人の子に恵まれました。弟媛は大碓命の国見で、大須ヶ洞の山に手を取られ登ったことが忘れられません。人々は撫子の可憐さと香靡さすごとく弟媛の恋が叶うよう弟媛を尋ねる人に、山穴の大蛇にさらわれた話や谷に落ちた話で守りました。弟媛が後に美濃に就かれた大碓命と密かに結ばれたと伝わると、人々は天皇と入媛の仲や大碓命と弟媛の恋を鯉になぞらえ、くぐり鯉（恋）やくぐり姫と呼びました。



## G-4 美濃桃山陶器のルーツ

### 須恵器から山茶わんの誕生

久々利及び周辺の陶器は、穴窯で造られた須恵器が始まりで、縄文土器の野焼きと比べ強度が画期的に向上したものでした。（当時の須恵器は羽崎中洞横穴墳墓から出土しています。）

1150年（平安期）ころ、中国伝来の灰を釉薬とする陶器生産も始まりますが、山茶わん（無釉陶器）の品物を朝廷に献上していました。

1300年（鎌倉幕府後期）頃から、釉薬を使用した味わい深い光沢のある陶器が作られるようになりました。



志野向付（茶碗）

### 美濃桃山陶（志野）の誕生

1560年頃、加藤景豊は大菅で、続いてその長男である加藤景成は大菅で窯を開き、絵柄や釉薬による色彩豊かな日本独自の志野などの美濃桃山陶を生み出しました。これらの陶器は、当時、茶の湯陶器として人気を得ましたが、やがて、九州発祥の磁器の隆盛により、量産の難しい志野は衰退し産地も不明となってしまいました。

### 美濃桃山陶の再興

その後、1930年荒川豊蔵は、大菅で古志野の陶片を発見し、産地を明らかにするとともに、自身も久々利に移り住み桃山陶の再現に取り組みました。以来、多くの陶芸家の人達が久々利に窯を開きました。現在では、市内小学校の校外学習の場としても利用されています。

また、加藤孝造は風塾で後進の育成にも励みました。



荒川豊蔵作業小屋(上)と窯(下)